

学生の生活習慣の意識および価値観に関する一考察

木村 匡登 高妻 弘子

A Study of Life Habit and Sense of Values

Masato KIMURA Hiroko KOZUMA

緒言

近年、子育てを取り巻く保育ニーズは、複雑多様化している。このことは少子高齢社会となったいま、核家族化が進み、就労形態も変化し、生活そのものが多様化してきたこととあわせ、保育をめぐる状況も変化してきたことが一因としてあげることができる。

その変化に対応するため、最近の動向として国は子育てを社会全体で支える仕組みを子ども・子育て関連3法に基づく「子ども・子育て支援新制度」が施行され運用されている。そしてそれら社会の変容にともなう保育ニーズに対応するための専門性の高い保育サービスの提供が可能になった。その専門性の高い保育サービス提供の担い手は保育者である。その保育者が専門性を発揮した保育実践をするためには、科学的に裏づけられた知識や技術を持つことのみならず、高い職業倫理が求められる。

保育に従事する専門職は、社会の信頼を得て、倫理に基づく実践をすることは必要不可欠であるといえる。この倫理に基づく実践は、専門職としての「価値」を具体化し、望ましい実践の方向性と実践者のとるべき態度や姿勢で取り組むことである。そのことを明確にしたものを専門職の倫理綱領にみることができる。ソーシャルワークに従事する者は、「ソーシャルワーカーの倫理綱領」があり、保育に従事する保育士には保育所保育指針に沿った形で「全国保育士会倫理綱領」が採択されている。

保育者はその倫理綱領に示された専門職としての価値を捉えた専門家でなければ、技術のみを実践の拠り所とした無味乾燥な実践者になってしまう。

本学は保育者を養成する短期大学として50年を超える歴史を有し、社会の変化に対応する保育者を養成する使命を担ってきた。今後、更に複雑化するであろう保育ニーズに専門的に対応できる人材を養成することが求められている。

しかし、中尾(2007)が指摘しているように、昨今の学生を取り巻く環境は価値観の多様化をもたらし、生活体験の乏しさから高等教育機関においても教育上の課題を有しているのが実情である。価値観の多様化は社会的背景、教育環境などから時代とともに変容するものであるが、援助者の価値観は、対象となる利用者(子どもとその保護者など)の理解と専門的援助に重要な意味を持つ。そのような中、対人援助職である保育者養成において専門職の価値をいかに学生に伝えるか、学内や実践の場(特に学外における実習教育)での教授法を探究する必要がある。また、価値観はこれまでの人生経験や体験、生活環境によって創りだされるものであり、学生個々の生活習慣に着目することは有為である。筆者らは本学学生の生活習慣と食生活の実態を明らかにしている(高妻・木村2017)。

そこで本論では、本学の学生の生活習慣の実態および価値観について把握し、特に専門職の価値において「対人援助観」との関連について明らかにすることを目的とする。

調査対象および方法

本学保育科において、保育士資格・幼稚園教諭免許状取得を目指す学生を対象に、2016年10月にアンケートを実施した。アンケートは自記式による質問紙調査法を用いた。

本調査は、基本属性、生活習慣および価値観について聞いた。価値観の調査項目内容については、西川(2009)の調査項目を参考に「対人援助観」「社会貢献」「社会正義」「専門職としての姿勢」の4因子とした。

集計および解析は統計解析ソフト statcel4.6 を使用した。

結果

1. 基本属性

アンケートの回収率は100%、回収数は390名(男性17名 女性373名)であった。学年別では、1年生195名(男性8名、女性187名)、2年生195名(男性9名、女性186名)であった。

表1に平均年齢について示す。1年男性は 18.29 ± 0.49 、1年女性は 19.11 ± 4.22 、2年男性は 20.22 ± 2.22 、2年女性は 20.01 ± 5.89 であった。

表1. 平均年齢±標準偏差

	1年生	2年生
男性	18.29 ± 0.49	20.22 ± 2.22
女性	19.11 ± 4.22	20.01 ± 5.89

2. 生活習慣について

生活習慣については、筆者らの先の研究(高妻・木村2017)において、食生活と生活習慣の関連について明らかにしており、規則正しい生活ができている学生の割合は、1年生で60.7%、2年生で51.8%の割合を示した。また、自分の将来に夢や目標を持っているかを示す割合は、1年生で86.2%、2年生で90.2%であった。

図1は、生活習慣と自分の夢や目標との関連について示したものである。1年生では、規則正しい生活習慣ができている学生ほど、夢や目標を持っている割合が高い傾向であったが、関連は認められなかった。一方、2年生においては規則正しい生活習慣ができている学生ほど、夢や目標を持っている割合が高く、生活習慣と自分の夢や目標との関連が認められた($p < 0.05$)。

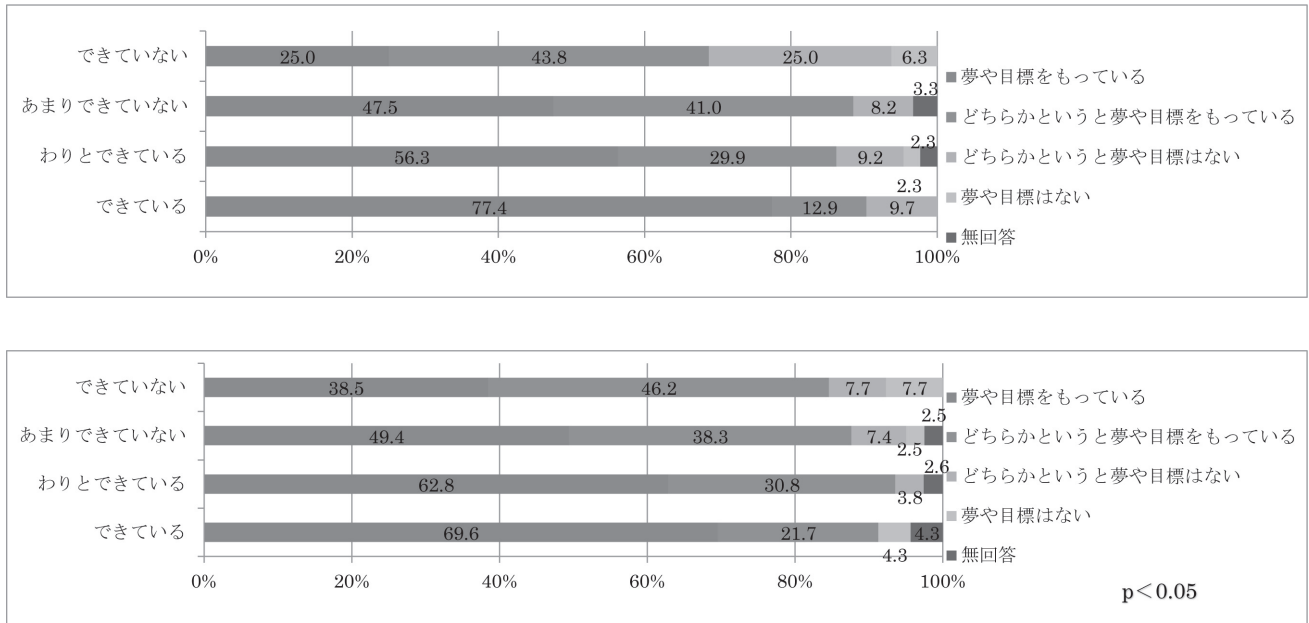


図1 生活習慣と自分の夢や目標との関連

3. 価値観について

西川 (2009) が開発した「ソーシャルワーク専門職の価値志向性尺度」に信頼を置き、4 因子 15 項目を設定して調査を実施した。4 因子とは「対人援助観 (5 項目)」「社会貢献 (3 項目)」「社会正義 (5 項目)」「専門職としての姿勢 (2 項目)」である。

15 項目の質問の割合については、表 2 に示す。

1) 対人援助観について

対人援助観についての 5 項目では、Q 1 「人の喜びや悲しみを共に分かち合いたいと思う」と回答した学生の「思う」「やや思う」割合は、1 年生で 82.7%、2 年生で 90.3% であり、2 年生のほうが高い割合を示した。

Q2 において、「人の役に立ったり、人を助けたりすることに充足感を感じる」と回答した学生の「思う」「やや思う」割合は、1 年生で 83.2%、2 年生で 92.5% であり、2 年生のほうが高い割合を示した。

Q3 において、「人の生きざまを深く知って、心から共感を覚えることがある」と回答した学生の「思う」「やや思う」の割合は、1 年生で 70.9%、2 年生で 77.0% であり、2 年生のほうが高い割合を示した。

Q4 において、「人を助ける仕事にやりがいを感じる」と回答した学生の「思う」「やや思う」の割合は、1 年生で 86.7%、2 年生で 93.3% であり、2 年生のほうが高い割合を示した。

Q5 において、「困っている人を見ると放っておけない気持ちになる」と回答した学生の「思う」「やや思う」の割合は、1 年生で 81.6%、2 年生で 91.7% であり、2 年生のほうが高い割合を示した。

2) 社会貢献について

社会貢献についての3項目では、Q6「職業に就くなら社会全体にも役立つ仕事をするべきだ」と回答した学生の「思う」「やや思う」の割合は、1年生で65.8%、2年生で70.6%であり、2年生のほうが高い割合を示した。

Q7において、「働くならば社会に欠くことのできない仕事をするべきだ」と回答した学生の「思う」「やや思う」の割合は、1年生で57.2%、2年生で58.0%であり、2年生のほうがやや高い割合を示した。

Q8において、「仕事を通しての社会に大きな貢献をするべきだ」と回答した学生の「思う」「やや思う」の割合は、1年生で61.8%、2年生で68.7%であり、2年生のほうが高い割合を示した。

3) 社会正義について

社会正義についての5項目では、Q9「政府は貧困者に対して支出すべきだ」と回答した学生の「思う」「やや思う」の割合は、1年生で72.9%、2年生で68.7%であり、1年生のほうが高い割合を示した。

Q10において、「全ての人に一定所得は保障されるべきだ」と回答した学生の割合は、「思う」「やや思う」の割合は、1年生で68.4%、2年生で70.2%であり、2年生のほうが高い割合を示した。

Q11において、「貧富の格差は、所得の再配分を行うことにより縮小すべきだ」と回答した学生の「思う」「やや思う」の割合は、1年生で61.6%、2年生で54.4%であり、1年生のほうが高い割合を示した。

Q12において、「野宿している人は本人自身に問題がある」と回答した学生の「思う」「やや思う」の割合は、1年生で27.6%、2年生で32.9%であり、2年生のほうが高い割合を示した。また、「どちらとも言えない」の割合は、1, 2年生とも半数近くを示した。

Q13において、「罪を犯した人の社会復帰を支援する上で主要な責任は、国が負うべきだ」と回答した学生の「思う」「やや思う」は、1年生で29.0%、2年生で29.8%であり「どちらとも言えない」の割合が1, 2年生とも半数近くを示した。

4) 専門職としての姿勢

専門職としての姿勢についての2項目では、Q14「自費でも仕事の技術を学ぶ研修に参加すべきだ」と回答した学生の「思う」「やや思う」の割合は、1年生で41.9%、2年生で46.2%であり、2年生でやや高い割合を示した。

Q15において、「仕事には誇りを持って臨むべきだ」と回答した学生の「思う」「やや思う」の割合は、1年生で81.6%、2年生で88.2%であり、2年生のほうが高い割合を示した。

また、これらの価値観に関する質問項目において、1年生の無回答の割合は2年生の割合と比較すると高い傾向にあることがわかる。

表2 価値観について

(単位：人(％))

			思う	やや思う	どちらとも言えない	あまり思わない	思わない	無回答
Q1	人の喜びや悲しみを共に分かち合いたいと思う	1年	108(55.1)	54(27.6)	14(7.1)	4(2.0)	1(0.5)	15(7.7)
		2年	123(63.1)	53(27.2)	15(7.7)	3(1.5)	0(0.0)	1(0.5)
Q2	人の役に立ったり、人を助けたりすることに充足感を見出す	1年	104(53.1)	59(30.1)	13(6.6)	3(1.5)	2(1.0)	15(7.7)
		2年	115(59.0)	65(33.3)	10(5.1)	3(1.5)	0(0.0)	2(1.0)
Q3	人の生き様を深く知って、心から共感を覚えることがある	1年	68(34.7)	71(36.2)	34(17.3)	5(2.6)	3(1.5)	15(7.7)
		2年	90(46.2)	60(30.8)	34(17.4)	7(3.6)	2(1.0)	2(1.0)
Q4	人を助ける仕事にやりがいを感じる	1年	119(60.7)	51(26.0)	7(3.6)	3(1.5)	1(0.5)	15(7.7)
		2年	126(64.6)	56(28.7)	9(4.6)	1(0.5)	0(0.0)	3(1.5)
Q5	困っている人を見ると放っておけない気持ちになる	1年	92(46.9)	68(34.7)	17(8.7)	3(1.5)	1(0.5)	15(7.7)
		2年	110(57.3)	66(34.4)	8(4.2)	5(2.6)	1(0.5)	2(1.0)
Q6	職業に就くなら社会全体にも役立つ仕事をするべきだ	1年	61(31.1)	68(34.7)	40(20.4)	9(4.6)	3(1.5)	15(7.7)
		2年	61(31.4)	76(39.2)	47(24.2)	5(2.6)	3(1.5)	2(1.0)
Q7	働くならば社会に欠くことのできない仕事をするべきだ	1年	54(27.6)	58(29.6)	48(24.5)	12(6.1)	7(3.6)	17(8.7)
		2年	43(22.1)	70(35.9)	64(32.8)	11(5.6)	5(2.6)	2(1.0)
Q8	仕事を通しての社会に大きな貢献をするべきだ	1年	56(28.6)	65(33.0)	42(21.4)	13(6.6)	4(2.0)	16(8.2)
		2年	49(25.1)	85(43.6)	50(25.6)	5(2.6)	3(1.5)	3(1.5)
Q9	政府は貧困者に対して支出すべきだ	1年	91(46.4)	52(26.5)	33(16.8)	2(1.0)	2(1.0)	16(8.2)
		2年	71(36.4)	63(32.3)	54(27.7)	4(2.1)	0(0.0)	3(1.5)
Q10	全ての人に一定所得は保障されるべきだ	1年	95(48.5)	39(19.9)	43(21.9)	3(1.5)	0(0.0)	16(8.2)
		2年	79(40.5)	58(29.7)	49(25.1)	4(2.1)	3(1.5)	2(1.0)
Q11	貧富の格差は、所得の再配分を行うことにより縮小するべきだ	1年	69(35.4)	51(26.2)	55(28.2)	1(0.5)	3(1.5)	16(8.2)
		2年	44(22.6)	62(31.8)	72(36.9)	12(6.2)	2(1.0)	3(1.5)
Q12	野宿している人は本人自身に問題がある	1年	18(9.2)	36(18.4)	102(52.0)	13(6.6)	9(4.6)	18(9.2)
		2年	13(6.7)	51(26.2)	95(48.7)	19(9.7)	14(7.2)	3(1.5)
Q13	罪を犯した人の社会復帰を支援する上で主要な責任は、国が負うべきだ	1年	24(12.2)	33(16.8)	95(48.5)	8(4.1)	19(9.7)	17(8.7)
		2年	14(7.2)	44(22.6)	93(47.7)	23(11.8)	19(9.7)	2(1.0)
Q14	自費でも仕事の技術を学ぶ研修に参加すべきだ	1年	26(13.3)	56(28.6)	79(40.3)	14(7.1)	4(2.0)	17(8.7)
		2年	23(11.8)	67(34.4)	83(42.6)	14(7.2)	6(3.1)	2(1.0)
Q15	仕事には誇りを持って臨むべきだ	1年	102(52.0)	58(29.6)	18(9.2)	1(0.5)	0(0.0)	17(8.7)
		2年	118(60.5)	54(27.7)	18(9.2)	3(1.5)	0(0.0)	2(1.0)

4. 生活習慣と価値観について

生活習慣と対人援助観の関連について図2～図6に示す。

Q1との関連については、1年生において、規則正しい生活の意識にかかわらず約8割の学生が、「思う」「やや思う」と回答していた(図2)。一方、2年生においては規則正しい生活ができている学生ほど、「思う」と回答しており、規則正しい生活の意識とQ1の対人援助観において関連が認められた(図2, $p < 0.05$)。

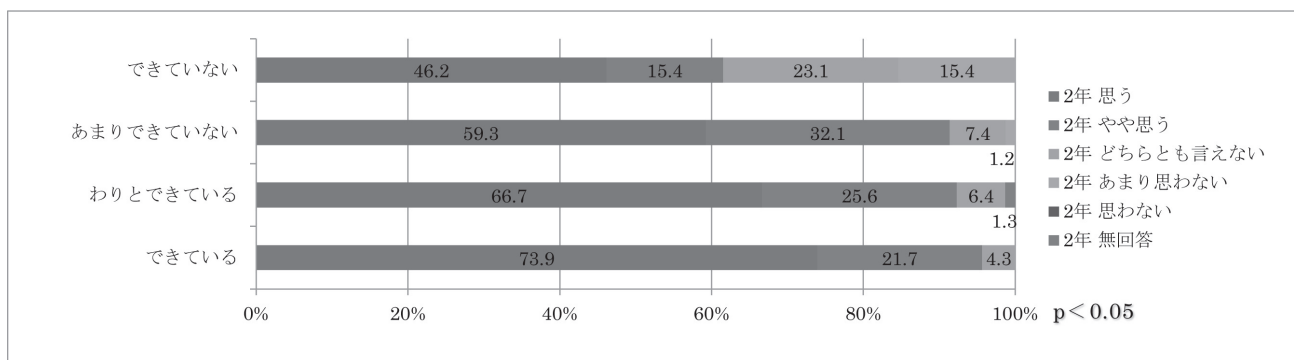
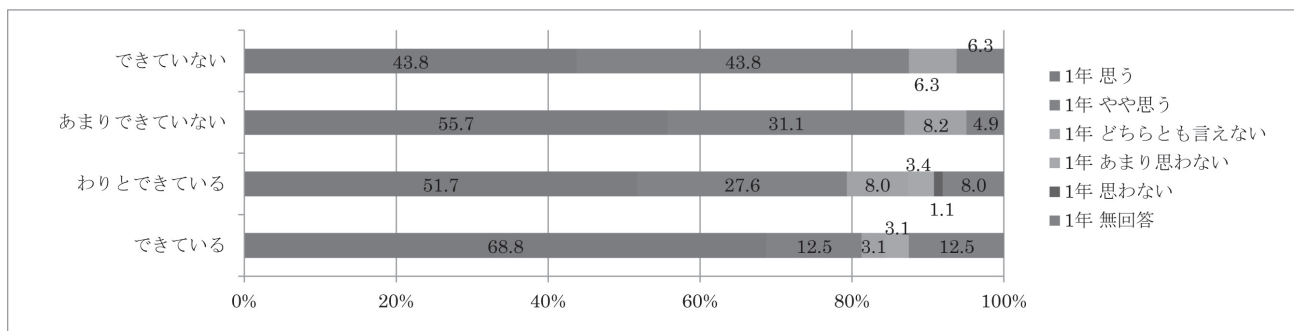


図2 生活習慣と人の喜びや悲しみを共に分かち合いたいとの関連

図3では、1年生において、規則正しい生活の意識にかかわらず約8割の学生が、「思う」「やや思う」と回答していた。一方、2年生においては規則正しい生活ができている学生ほど、Q2について「思う」と回答しており、規則正しい生活の意識とQ2の対人援助観において関連が認められた ($p < 0.05$)。

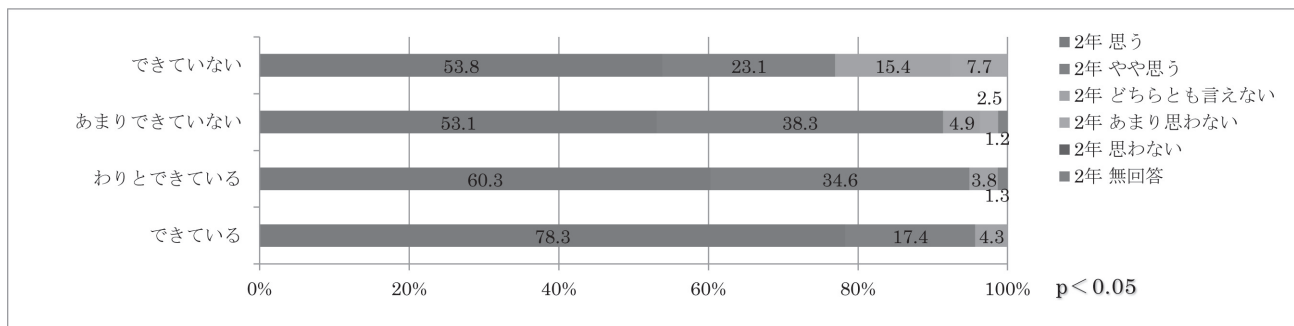
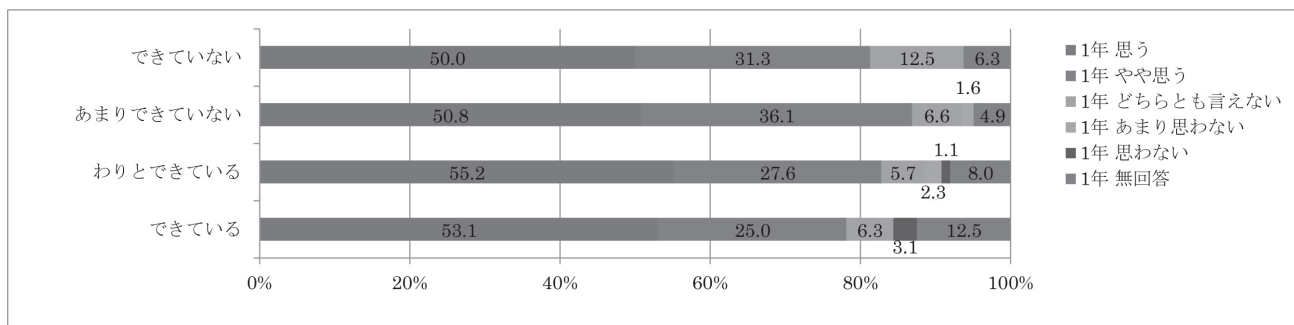


図3 生活習慣と人の役に立ったり、人を助けたりすることに充足感を見出すとの関連

図4では、1年生において、規則正しい生活の意識にかかわらず約8割の学生が、「思う」「やや思う」と回答していた。一方、2年生においては規則正しい生活ができている学生ほど、Q3について「思う」と回答しており、規則正しい生活の意識とQ3の対人援助観において関連が認められた ($p < 0.05$)。

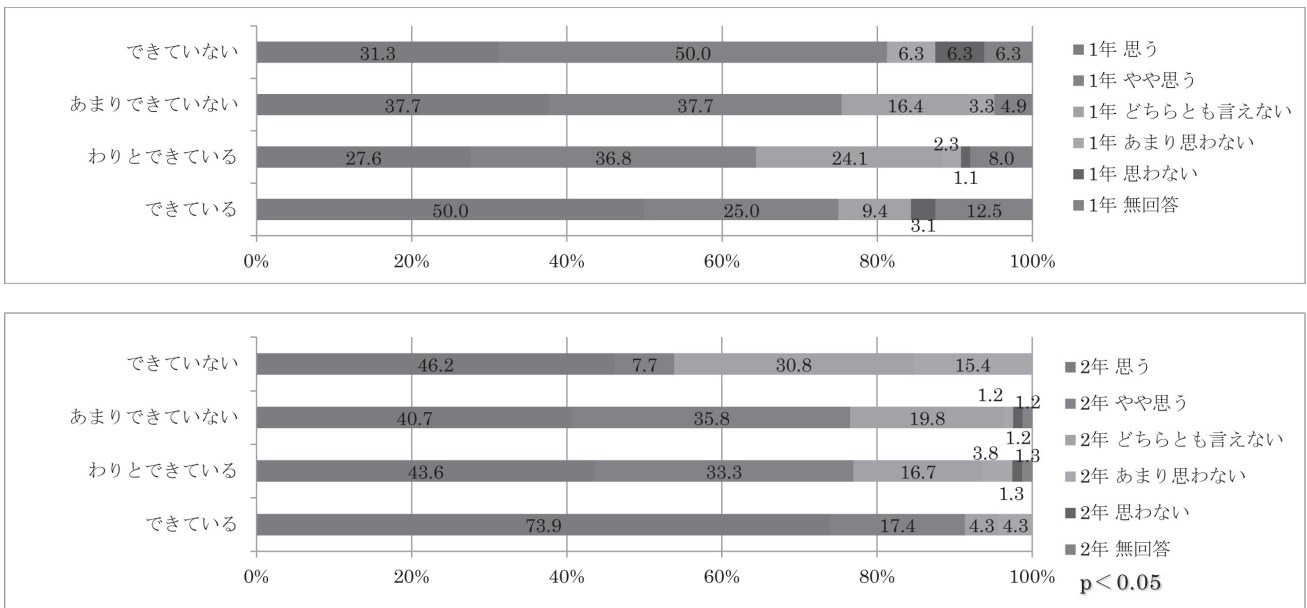


図4 生活習慣と人の生きざまを深く知って、心から共感を覚えることとの関連

Q4との関連について図5に示す。1年生において、規則正しい生活の意識にかかわらず約9割近くの学生が、「思う」「やや思う」と回答していた。一方、2年生においては規則正しい生活ができている学生ほど、「思う」と回答しており、規則正しい生活の意識とQ4の対人援助観において関連が認められた ($p < 0.01$)。

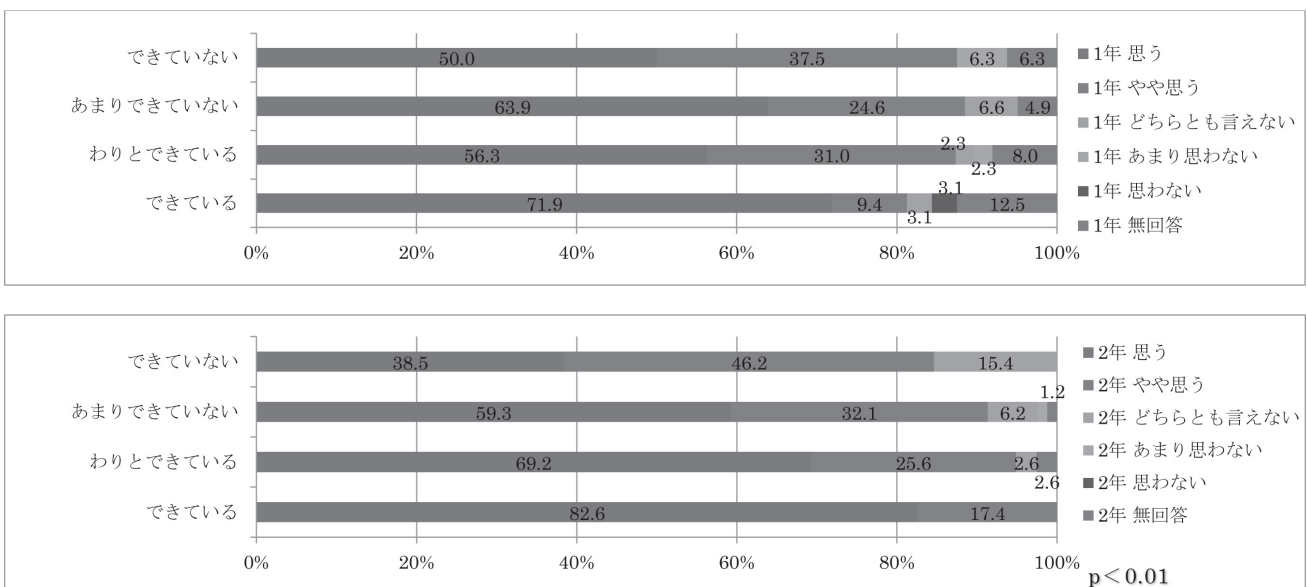


図5 生活習慣と人を助ける仕事にやりがいを感じるとの関連

図6では、1年生において、規則正しい生活の意識にかかわらず約8割の学生が、「思う」「やや思う」

と回答していた。一方、2年生においても規則正しい生活の意識にかかわらず、Q5について「思う」「やや思う」と約9割の学生が回答していたが、1、2年生ともに関連は認められなかった。

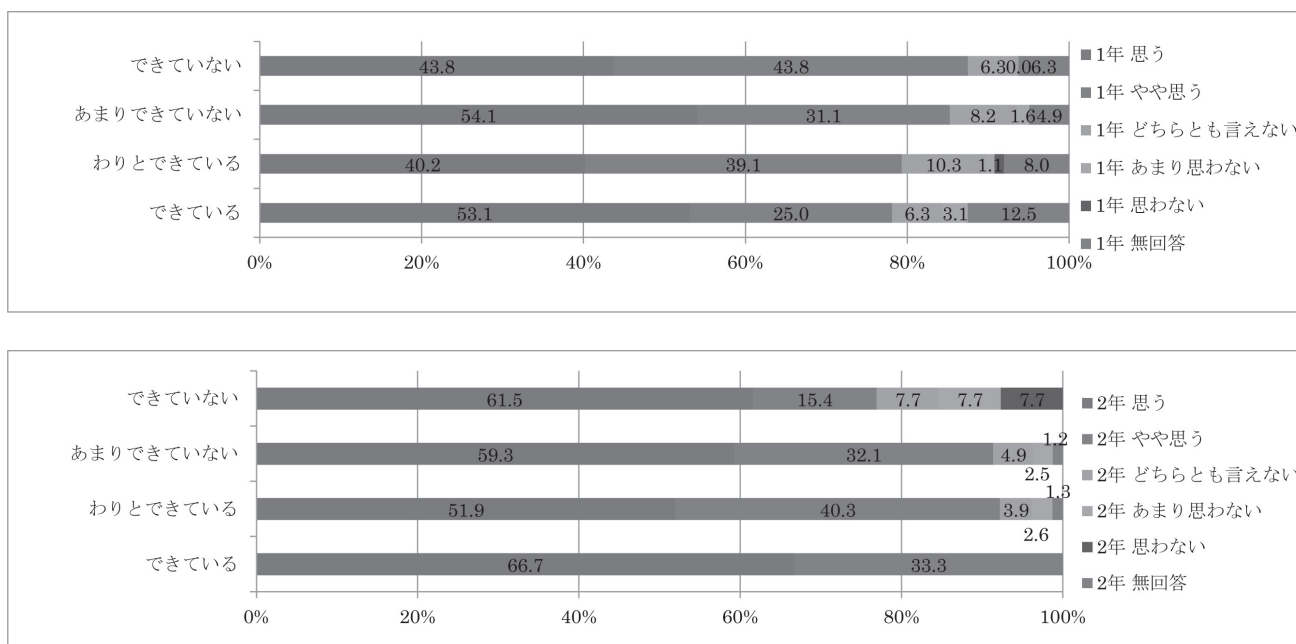


図6 生活習慣と困っている人を見ると放っておけない気持ちになるとの関連

考察およびまとめ

本研究は、本学の学生の持つ価値観の意識の実態を明らかにし、その価値観と学生の生活習慣にどのような関連があるのかを明らかにするために自記式による質問紙調査法を用いた。

学生の持つ価値観で、とりわけ対人援助観を示す5項目の結果については、「思う」「やや思う」の割合は「人の生き様を知って、心から共感を覚える」割合を除き、1、2年生とも8割以上の割合が示された。このことは、保育専門職を目指すことを前提に本学へ入学した目的意識の表れであるといえる。「人の生き様を知って、心から共感を覚える」質問項目については、前述の現代の若者像からの表れである。対人援助観を示す5項目の傾向は、1、2年生の間で示された差については、2年生のこの時期は、1年生に比して、資格・免許取得の実習が学外において3度行われており、1年生については、前期に保育園および福祉施設においてそれぞれ1日体験実習を経験しているものの、理論的な講義についても半期を修了したところである。そのため、大学における学修の習熟度の差が表れたと考えられる。

また、学生の生活習慣と対人援助観の関連については、2年生においては、Q5をのぞき、規則正しい生活習慣と対人援助観に関連が認められた。一方、1年生では、関連は認められなかったものの、規則正しい生活ができている人ほど、「対人援助観」の質問項目に「思う」「やや思う」に8割近い学生が回答していることが明らかになった。このことは、本学で理論的にも技術的にも学ぶことに併せて、普段の日常生活における経験や規則正しい生活を送ることも対人援助観を涵養していく一助となり得ると考えられる。

増田(2006)は、これからの保育者に求められることとして、「人間性・倫理性」を挙げ、「常に自身に関心を持ち、新たな自分を発見し、自分の変化を楽しむ心」を日常生活の経験を通して見出すことの大切さにふれている。それが感性豊かな保育者を創りあげる核であることを示唆している。

また、専門職の価値を形成していくために、これまで経験してきた自分自身の個性や持ち味に関心を

向け「懐の深さ」を身につけることであるとする尾崎（1997）は、専門職の価値を支える援助観は、みずからの生活経験で培われた価値観を大切にすることであることを示している。尾崎はさらに、援助者の「曖昧さ」に着目し、実習教育プログラムに「ゆらぎ」の経験の重要性を挙げている。

これらの研究結果から、今後の課題として、学生の日常生活体験に着目した教育方法を模索していくことが必要であると考え。また、価値観形成において、実習の体験が果たす役割は大きいことについては、多くの研究者の指摘するところである。実習教育の充実を専門職養成の価値を修得する機会と捉え、倉橋（1976）の「育ての心」たる保育者養成に効果的な教育方法を継続して研究していきたい。

参考文献

- 中尾優子（2007）. 現代の若者の新しい価値観について, 臨床教育学研究年報, 33号, p. 45
- 高妻弘子・木村匡登（2017）. 学生の生活習慣の実態および食生活の意識に関する一考察, 宮崎学園短期大学紀要, 第9号
- 西川ハンナ(2009). ソーシャルワーク専門職の価値志向性測定試案, 共栄学園短期大学研究紀要, 第25号, pp. 67-78
- 増田まゆみ（2006）. 「子どもの生活を支える援助者として」, 網野武博・無藤隆・増田まゆみ・柏女霊峰, これからの保育者に求められること, ひかりのくに株式会社, pp. 85-123
- 尾崎新（2004）. 対人援助の技法, 誠信書房, pp. 1-19
- 倉橋惣三（1976）. 育ての心, 株式会社フレーベル館, p. 1
- 尾崎新（2002）. 「現場」のカー社会福祉実践における現場とは何かー, 誠信書房